遞信省認可

毎月四回發行

いらつめ第四十三號目次（明治廿三年二月廿二日）

●家　政…衛生料理法（第十二）……岩間芳松
馬鈴薯の可否‖野菜鶏煮染法‖小丸茄子冬瓜煮染法
○裁縫獨學び（第十一）……木下貞子
單羽織‖袷羽織‖子供綿入羽織‖常巾二丈三尺を以て羽織表を裁つ‖三身羽織

●文藝美術…懸賞文藝俳句和歌唱歌文章題、難破船圖題（箏水女史‖撫箏女史‖山のや‖小谷共治‖翠亭‖箏水女史‖鹿又松乃‖窪田こま子‖根本重藏‖目時絹子‖永島芳子‖瀧川恒太郎‖後樂散士
○新題

●雜　纂…日本陶器小史‖美聲の心得‖女學生の品行‖丁抹素服組‖外國に對する醜態の婦人‖ことしの夏物‖通信女學‖わらべ‖料理學校‖矯風會事業擴張‖文學に口實をつくる‖柳暗花明‖令婦人の面會日‖船にのる心得‖沐浴の心得‖身体健全法

●寄　書…大川氏に返答　高田次雄

●通信問答

廣告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二十九錢郵税共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵税共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵税共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵税共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六十五錢郵税共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵税共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府内に限り無郵税●毎月四回（八日十五日二十二日三十日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局さある處に（神田郵便局）さ記し、受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）さ御記入の事●郵券代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り増しなれば妨げ無い事●見本は五厘切手で並製三錢別製四錢領收の上差し上げます●廣告料一行金八錢、割引無し●第廿八號から本社から賣り出す證さして雜誌の表紙に成美社の捺印を加へましたから是を目標さして御求めを願ひます。捺印の無い雜誌に就いては本社で一切責に任ぢません。捺印の無いのを御求に爲っても代金支拂に及びません

從第三十八號至第四十七號十部版權所有

明治二十三年二月廿一日印刷
明治二十三年二月廿二日

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　同市同區同町同番地成美社方寄留　佐野忠吉

發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

本號には　**難破船圖題**　和歌俳句唱歌文章　陶器小史●矯風會　**丁抹素**服組

乘船心得●沐浴の心得　**ことしの夏物**　共他種々の事が出て居ます

いらつめ第四十三號

社告

いらつめは爰にふたゝび体面を改め來三月から左の通りにする事となりました。

一　これまでの實用一方、表紙も無い体裁と改め毎號優美な仕立てにする事。

二　月四回發兌を月二回に改め、一部二錢五厘を一部五錢に改め、その代り記事が成るべく許多の號に亘らぬやう勉める事。

以上の通りで實は社一同の意見はあらかじめ此氣でも有りませんでしたが、大方からいろ〳〵御忠告も有るため其輿論に從ひました。　いらつめは婦人雜誌中でも最も美術的だと言はれたのに此頃の無表紙はあまり感心しないと云ふ事、及び發行度數があまり頻繁だといふ事、この二ケ條は實に諸嬢からの御望みで終に折角の事ゆゑ其御説に從ふ事となりました。　記事挿畫其他の事に於てハ全く從前の通りで、外に何も變りません。

それ故に其準備として今月廿八日發兌の第四十四號ハ一回休刊してその代り來三月十日ゐ新樣の方を發兌します。

家政

改良實用衛生料理法(第十二)

岩間芳松

上等料理の部

三十八　馬鈴薯の良否。　馬鈴薯は芋類の中で第一等の食物です。　誠に澱粉に富み消化も極宜いです。　芋の見分方は黄色を含むものハ味極宜しく、赤色や青色の者は味が悪くわります。　而して産地は甲州を第一と致します。

馬鈴薯の皮をむき去り、いゝ程に切つて水ゐ込れ、而して鹽湯煮にし、柔らかになつたらば湯を絞り、叉鍋(水なし)に入れ、火ゐかけ、能く振るのです。　芋の粉のふくを度として裏漉しにし、叉鍋に入れ、鹽、胡椒、肉豆蔲一摺加へ置き、別の鍋へ牛乳を入れ、火に掛けて温ため、薯の中へ少しづゝ入れ、練つて付合すのです(西洋法ではほうれんさう、馬鈴薯に牛酪を少し入れます)

百合、姫百合、大百合等の宜しい處を鹽湯煮にし、少ゝ甘味を用ゐて芋同樣にするのもよろしいです。

生青豌豆を鹽湯烹にして、油鍋に牛酪を入れ解かし、饂飩粉少々入れ交せ、叉牛の乳を少ゝ宛入れて能く混ぜ、米糊程に練り、(但し薄く)豆を入れ、鹽、胡椒を加へ、交ぜて、付合せにするも宜いです。

赤茄子のへたを小刀でゑぐり取り、沸騰した湯ゐ入れ、手早く皮を剝き去り、種をしぼり出し、鍋に牛酪を解して、赤茄子を入れ、鹽、胡椒を振り、弱火で徐ゝ能く煮

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

です。以上は鳥の付け合せに極宜敷いです。

三十九　野菜鶏煮染法（人参、牛房、大根、銀杏、里芋、焼豆腐、筍、葱、八ツ頭の類）　鶏骨附のまゝ切り鍋に入れ、水を加へ、火に掛け、次第に起るカスをすくひ取り、カスのやむのを度とし、野菜物を此内へ宜しき品二三品生で入れ、能く湯煮とし、胡椒を振り、味淋又は砂糖を少し加へ、醤油を入れて味を付けるのです。少し汁の有る位が宜しく、汁には卸生姜を加へるのです。

筍、銀杏等は能く湯煮をするのです。

四十　小丸茄子、冬瓜同しく別法　鶏は前と同しく水煮をし、少し塩を加へ、余り大きくない茄子の皮を去り、水に入れ、冬瓜の皮剝ぎ横五分縦一寸程に切り、別鍋に脂肪を解かし、二品（茄子冬瓜）を入れ、塩を加はへ、能く煎つて色の付いた頃、皿に取り、饂飩粉を鍋ゑ入れ、能く混ぜ、鳥の汁で少しゴゝのばし。鳥、茄子、冬瓜共ゑ入れ、胡椒をふり、少し甘味を加へ、醤油で味をつけ、汁共食べるのです。

四十一　笹がき牛房、小丸麩同しく別法　鳥の水煮は前に同しく、白玉麩（小さき生麩で麩屋にあります）、笹がき牛房を能く〳〵油で煎り、茄子、冬瓜と同しにするのです（但し麩は後からいれます）

裁縫地學び（第十一）

木下貞子

單羽織裁縫法

單羽織をぬひますには先づ袖を自分の方にし袖口を向ふにしてぬふのです、而して口明を合せましてから袖附まで縫ひ廻して袖口を絎くつけ袖形を造りましてそれを袖下ゑ入れ伏縫にし引返し躾糸を掛け巾を度り折目をつけ而して後脊を縫ひはじめるのです、但し脊は伏縫にし後巾肩巾前巾など當り又折目をつけ裾口の前先きを三ッに折り夫れから襟山と脊縫との處を合せ止め針をさし襟の中へは前身頃を疊みこみ紐付より下は襟も身頃も同しやうにあたりまへにぬひ紐附より上は襟の方を身頃より少したるむやうにし襟肩の處は一枚殘してぬひ襟先は一分ほど中の方をぬひ裏の方へ折をつけ襟先も裏の方へ返してぬひつけそれから襟をひくゝりかへして三つ襟を絎けそして後ろ襠前へ襠を付けそれを伏縫ゑして袖を付け袖をくけるのです。

袷羽織裁縫法

袷羽織の縫方は先づ裏袖へ袖口をかけ表を已の方へ向け裏袖を向ふにして口先をぬひ袖巾を度り折目をつけ夫から裏を一分ほどつらして前下をぬひ裏の方へ折をつけおき前の身頃を左右へのばし前先は裏へ少し三分ほども去り夫れから前の端の方へしつけを掛け襟の中央と脊筋とを合せて止針と刺し其の處から前先迄通例の着物のやうに襟をつけ襟先きの縫込

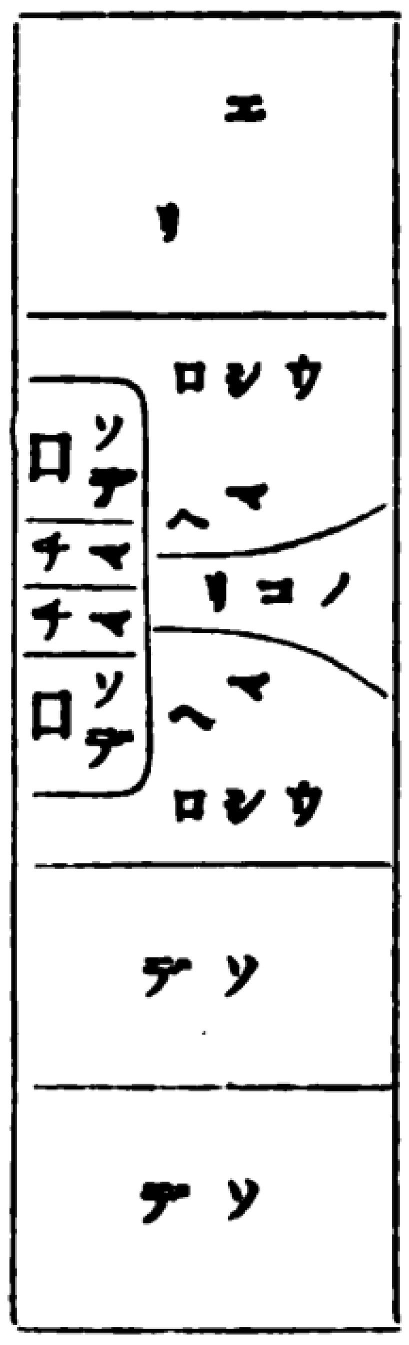
は裏の方へ返へしてぬひ付け引きくりかへして三の襟をくけ次に後褄をつけ褄の巾をはかり表袖をつけ袖裏の前を五寸残してぬひ引きくりかへして口先を合はせ袖附を一枚〱に別々になし袖下とぬひ袖形を拵へて表の方へ折目をつけ前の身頃の方から手を入れてまちを四つぬひあしそして裏袖を絎付け最後に袖や襟へしつけをかけるのです。

子供の綿入羽織裁縫方

子供の綿入羽織をぬふには最初に表袖をぬひしつけをかけ次に裏へ袖口をかけ夫れから袖下をぬひ袖巾を度り次に脊をぬひ後巾前巾肩巾を度り次に前下をぬひ又左右の褄をつけ夫れから裏表の袖を付け綿を入れ引きくりかへして表へ向けたゞしくして袖口からくけ八ッ口をくけ次に前端をぬひつけ又襟を付け而して絎付け襟へしつけをかけるのです。

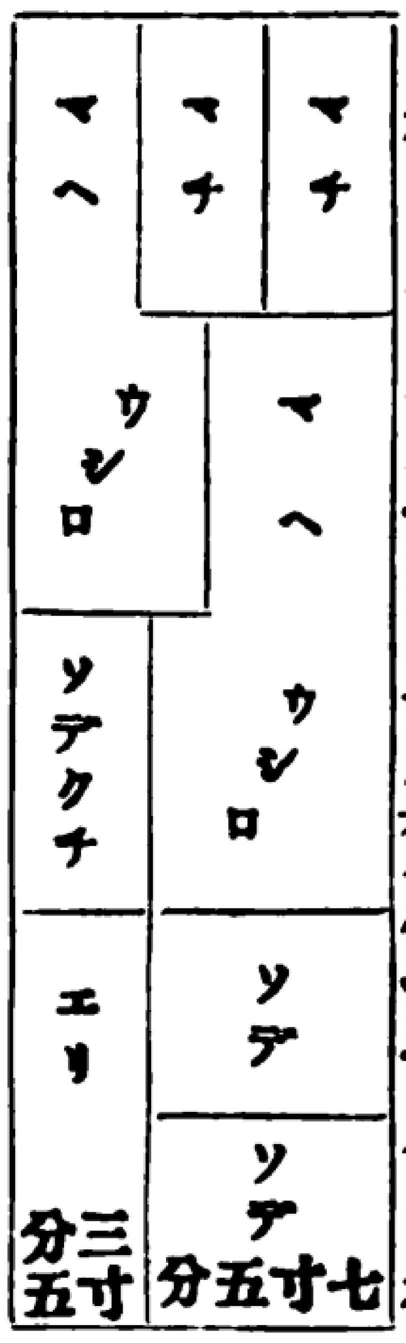
常巾二丈三尺を以て羽織表の裁方

後丈け二尺四寸袖丈け二尺四寸五分袖口一尺八寸褄一尺前丈二尺五寸二分襟肩二寸七分襟丈五尺五寸六分余



一尺一寸巾長一丈二尺を以て三ツ身羽織の裁方

袖丈一尺五寸丈二尺襟肩一寸七分袖巾七寸五分襟巾三寸五分後巾六寸四分前巾四寸六分褄巾三寸二分



文藝美術

第十一回懸賞文藝得點

題　難破船の圖（括弧の中は添削した句です）

○俳句

ふねよりもまづ砕けゝり人ごゝろ…………琴水　女史（オホサカ）

右いらつめ一部

○唱歌

（イ）　撫箏　女史（ミノ）

はらからが　水の（底の）もくづと　消えはてし　うく萍の（それならで（ウクからナラデまで削る）　しづむ思ひを（そのかなしみを）　晴らさむと　かきしこの書は中々に　今はなげきの種となり、　そらにしられぬ袖しぐれ　干すひまさへも無きまゝに　しほりすりつゝ筆そめて　あたのくり言のくれ物しつ（シホリから物シツまで削る）

うさ晴らす　ためにかきしが　なか〱に
そでにしぐれの　種となりけり。

（ロ）　やまのや（フシミ）

はばしら折れて梶くだけ（はばしら砕け、梶をれぬ）、あないたましの船人や。　世の海わたり行かん人（浮世の海をわたる人）　なみかぜつねに心せよ。

さかまく波に舟はくだかれ、　のりては消えぬそこのもくづと。　わなゝはれとや見ん人も（あはれにてそと見る人も）世のわらなだに（荒海に）舟をすふくなる（評、兎に角通じますが調子は前の一首と全くちがひます）

右二曲いらつめ一部

（ハ）　　小谷　共治（キヤウヂ）

かゞやきし月のひかりと　あをぞらは今いづくぞや。　くろくもは空をおほひて　はげしくも雨を降らしぬ（夜はおぼろ雨篠をつく）。　風すさみ、（風たけり）いかづちひゞき、なみたかく（ふゞる浪）ほばしらを越も。　子はちゝに、つまは夫に　はなれじとたもとにすがる。　あゝ日頃したひし（ねがひし）名譽　財産にのぞみも絶えぬ。「おゝ神よ、われらを救へ」。　異口同音たゞいのるのみ（かきくどく聲や嗄れなむ）。　いきしにのさかひはこゝぞ。　そこいたず道しるべなる。

（ニ）　　翠　亭（スヰテイ）

うなばら黒く雲たれて　光りはげしき稲づまの　すきまあらせず物すごし。　とゞろき高くいかる浪　たちまちに山。　うづまきひくゝ吼る潮　たちまちに谷。　ふねはくだけて人々の　つゆの玉のそいます絶も。　浪間（浪に）きらめくなき人の　魂はいづくに宿る（迷ふ）らん。　あゝわぢきなしこの浮き世、　思ひかへせば人々の　こゝろの舟もまた同じ。　わがあやまちの荒なみに　あふ事あらば沈むべし。　かなしき淵に　いましむべきは慾の海、　つゝしむべきは色の洋。　こゝろの舟のかぢをとれ。（評、添削が少いとて完璧といふ譯では有りません。　添削の入れにくい唱歌です）

（ホ）　　琴水　女史（ナカ）

なみたかく風あらし。　はしら折れ、帆もやぶる（破れぬ）ふねのもろびと色あをく（舟の人いろあをざめて）　なみだかはき、聲かれたつ（かれ絶ゆ）。　きらめくは星のひかりか、　月もなく、闇ふかし（闇いとふかし）。　夜潮さむく、からだふるへ、　歯の根あはず口わなゝく（口すわなゝく）。またと無しこの世のいのち、　あるは只いまの間ばかりす（いのちたゞ今をかぎり）。　高き浪影を沒して（やがて浪ふねを呑みぬ）。　すさぶかぜおとすごし（知らず顔、風いとゞあらし）。

右第三等賞

（へ）

鹿又　松乃（イハシロ）

波の山はたかく、風はあらし、　いゝいゝいまはの名ごり何をかとめむ。　ふる郷の山の（きーの）影は（影も）見えず、　こひしきわが家は雲のいづこ。　九天地獄おどれる舟（舟はこの葉）、　いゝいゝからをば（からをー）まかせていざやあの世！

沖のいろあれて、雲ひくし。　あはれ乘りひとのいのちはいづこ（いのちや絶えん）。　雲か、飛ぶ水か、咫尺見えず、　やみよりやみにまよふ舟、　破裂のひゞき、さけびのこゑ（さけべる聲に破裂の音）　むなーくのこる靑うなばら。

右第二等賞

○和歌

もろひとの心づくしもうたかたの
泡ときえ行くさますかなしき……………窪田こま子、（トウケイ）

いかならむさかまくなみおくだかれて
もくづと消えん人のこゝろは……………根本　重藏（フクシマ）

右いらつめ一部

沖とほくいでにしふねのかちたえて
あはれーづむと千鳥なくなり……………根本　重藏（フクシマ）

右いらつめ二部

しらなみのまに〳〵うかぶ玉のをれ
よるべなぎさの泡と消えけり……………根本　重藏（フクシマ）

ふねのみかさかまくなみにかぢとりの
こゝろも千々にくだかるゝかな……………目時　絹子（イハテ）

右第三等賞

ふねくだく岩にもあれや今さらに
うき出る人のたよりともかな……………永島　芳子（ヰブリ）

ふな人のたまもくだくるあらなみに
何と時とておさるむらとり……………永島　芳子（ヰブリ）

右は第一等賞に拔けるべき價値はありますが、而も一句も違はず同じな歌を寄せた人が外にも有りましたので審査以外とーます。

○文章

（イ）

瀧川垣太郎（イハシロ）

あゝ海神は何を怒らせたまひしぞ。　山なす波はあくまでも荒く、閃きわたる稻妻は肌寒きまで物すごし。　向ふに見ゆる一葉の汽船、烟は吐けども靡きもせず（烟はからセズまで削る）船体なかば水に入り、後への方に斜なり。　これぞこれ船人が鬼とも蛇とも惡魔ともたとへんやうもあら波の下に

隠れし暗州（暗礁）に乗りあげしにぞ有りつらむ。かの船にある諸人の心のほどは如何ならん、思ひやるだに心ぐるし（いたましき）。なぜに（何故）航路をあやまりしか。去りとても亦燈台の光りをしかとは（さだかに）見ざりしぞ。

（ロ）　　後樂　散士（ノナガ）

圖——見るも恐るしき（恐ろしい）難破船！　吹く風は用捨なくあら浪を蹴上げ（いらだて）、帆さへ檣さへ裂きくだいてまだそれでも飽き足らぬか、船——人——もろとも千尋の底に葬らうとして飛びまはる（飛びまはるの語拔く）そのすさまじさ。　其時船長はじめ水夫乗客の心は（船長から水夫まで削る）…あゝ考へるさへ身体が寒氣だつ。　今までは此處かしこと漂ふて（漂ッて）まだ幾分か運命のあつた時分は及ばぬまでもと運轉して居た機關も自由も失つた様子。その筈一二瞬間前（瞬間の前）打ちつけたとも見ゆる（見える）大浪のためても無殘、船は岩角に衝突し、はや沈沒のありさま。　其時船長はじめ水夫乗客の顔は……あゝ實に……圖を見るさへ恐ろしいもの…實際なら。が、この忌ましき（忌はしい）圖を功名顔に貴重な時間を費して畫いた人の心は恨めしい。が、（人の心は恨めしいものゝ）、猶一層考へたるら是もわれ〳〵の奨勵者、われ〳〵の訓戒者の一人として紀念にもなりましやうか。世の中は大海の如し（大海のとほり）とは誰もよくいふ言葉、して見ると吾々はその水面に浮泛する（浮かぶ）船です。いつも平和な時のみならば格別けれどもこの圖のやうな暴風にあふ事があるから（事もあるものだ）。いや、むしろ多いものだ平生からその用意を爲なければならぬ（「事」を入れる）。が、この圖をかいた人の意見は何處に有るか、亦之を懸賞として出したいらつめ記者の心は？　が、散士の考へはと問はれたならば、——

勉强をふねに作りて忍耐の舵もてつねに渡れこの世を。

右いらつめ一部　（未完）

○懸賞文藝新題

○第十二回題（何でもよし）
右　處女の愛情。　二月十日〆切

○第十三回題（唱歌淨瑠璃及び文章に限る）
右　桃花　二月二十日〆切

○第十四回題（文章）
右　春月　三月十日〆切

○第十五回題（唱歌）
右　こぞの燕　三月十日〆切

○第十六回題（和歌唱歌句及び文章）
右　春の空　三月二十日〆切

○第十七回題（何でもよし）
右　雨中に櫻を折る　三月二十日〆切

○第十八回題（何でもよし）
右　いとまごひ　四月十日〆切

○第十九回題（何でもよし）
右　若葉かげの假り寐　四月二十日〆切

右文藝應募者心得

第一　題を種にして成るべく趣向を立てるのを僘ぶ事○第二　唱歌淨瑠璃及び文章は各一千五百字以内の事○第三　一人で二種類の作を投せられた人は一種類各別々の紙に書く事○第四　原稿には宿所姓名明記の事○第五　原稿は半紙ニ限る事○第六　第二第三第四及び第五に背くものは沒書。賞品は一等賞滑親良信二氏の內御好みの**肉筆着色絹地**畫書家の手に成つた書帖だけの大さの一面○二等いらつめ十二部○三等三部。

雜纂

日本陶器小史（其三）

粟田燒　薩摩と稍同質の陶器は西京の粟田のです。本處は元和寬永の頃九右衞門なる者西洋の磁器を見て創めたのに基きます。其質は勉堅で能く久しきに耐へることが出來色は薩摩に比ぶれば、稍濃黃色なのと、西洋式に由つたゆゑ、薄手なことゝ此二つが異なつたる重もなる點です。是を俗に卵黃陶といふのは即ち此故です。昔し裝飾した繪畫は甚だ鮮明でない二三の色料を以て淡泊な下畫のやうな者の儘でありましたが、此頃歐州の市場で好評を得ましてから、務めて外國の花様着色の方法ニ擬らひ、燦爛見らるべきに至りました。殊に薩摩や伊萬里燒の規矩に倣ひ、形狀も稍更ためましたゆゑ、益々外國市場に賞譽を得るでしやう。然し今一層輸出の額を增さうとれもへは、濃黃色を淺黃にする工風を用ゐ、以て繪畫の燦爛を助けなければなりません。而して繪畫も亦東洋古代の模樣や歷史小說に據て裝飾することが望ましいです。

淡路燒　是れは粟田と質が類て、甚だ磁器に近いです。が、其色は微黃を帶び、釉藥は多く深黃綠で又た美麗です。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

從來廉直のものばかり出し、名器を造ることを勉めなかつたためか、彩畫及び形狀の工風に乏しく、珍として愛すべき者を見ません。然し一審覆したなれば、これも必ず外國市場に名を出す時期に逢ひませう。

出雲燒　是れはまた淡路に次ぐ者であつて、それと全く規矩を仝じう致します。が、等級を定むれば、稍上流にありましやうけれど、進歩の點に於ては尙ほ少年なことを免れません。能く内外の事情を通觀して、一新したならば、隨分栗田と兄弟を爭ひましやう。

瀨戸燒　瀨戸燒の歷史ハ略前に叙べましたが、同所は陶器の中興の土地なるを以て、其術が今は隣邦に波及しまして、美濃なとに於ても續々製出致します。然し是等の者も槪して瀨戸といふ名を負びてゐるのは、やハり彼の黃門と云へば、光國、大師と云へば、弘法に限るやうに、誤認するのと同轍でありましやう。本處は久遠の熟練に因て少しも脱落る所がなく、形狀といひ彩色と云ひ皆賞するに足ります。が、常に伊萬里に勝を制せられるのを見ますれば、まだ内外の需求者に充分滿足を與へたとは申されません。例令一のバリツシイを出して、益々改良を計り、伊萬里に兄となるやうに、務めたいものです。然し廉直品の出るにハほど〳〵感服致します。

西京燒　京都の陶器は夫の樂燒をハじめと致します。樂燒は天正の末千の利久が茗讌を嗜好し、京都に徘徊する朝鮮人なる飴屋に高麗燒を寫さしめました。が、意に適なひませんでしたゆゑ、更らに其子長二郎（或ハ朝二郎にも作る）に燒かしめました。そこではじめて形狀釉藥とも宜しさを得ましたとね、はじめて世に賞せられるやうになりました。（樂燒代々書に據りますに、飴屋の妻夫の亡後剃髮して茶器を作る之を尼燒と云ふ、と見えます、のを見れば長二郎は此から授法したかもしれません）。故に樂燒の系譜の冒頭に飴屋を置きますが、長二郎を此の元祖と致します。豐太閤深く之を珍で、遂に聚樂の樂の字を金印に刻して賜ひましてから世で之を樂燒と申します。降つて慶長のころ淸水に窯を造り、專ら高麗呂宋の陶器を摸造しました。が、當時は未だ盛んでありませんでした。野々村仁淸が出てから、御菩薩が池の粘土で一種の陶器をはじめました。是れに因て、淸水燒の名は稍世間に知られるやうになりました。が未だ磁器を出すに至りませんでした。後ち夫の木米の時に至つ

てはじめて京燒の名を内外に博す基ゐを開きました。　此木米は元と陶工ではなく、一旦淸人朱笠亭の陶說を讀んでから、陶器の業に志じ、陶工頴川に就いて燒窯の術を學び、具さに辛苦を嘗め、はじめて靑花白地（即ち染付）の蘊奥を發見し、傍ら繪畫を學んで、文人畫を裝飾する鼻祖となりました。

此靑花白地の法はさきに祥瑞が傳へたと申しますが、釉藥がうすらつて磨滅の憾がありました。然し木米に至りはじめて完全無缺の地位に達しました。　これで木米が陶器に力を盡したのがわかります。　西京の陶器は以上のほか乾山六兵衛等の名手が世々出まして、其業をおこしませんかつた故、形狀といひ、燒といひ、毫もぬかりはありません。　けれど夫の善五郎がはじめた永樂燒のほかは同所は文人畫の行なはるゝ土地なるゆゑ。裝飾する繪畫は兎角東洋風の文雅に流れ、外國人の意に投しないうらみがあります。

美聲の心得（其三）

さて初學は最初十分時間ばかりも聲をつかへて後よく休みますが是が甚だわるいのです。　それも一寸なら極よろしいですが、長いのは最も不利益です。　それ故この場合に於てはほんのわづかばかり休んで更に立てつゞけて十分間もまた叫ぶが宜しいです。

このやうにして、そして前々號に於て說いたとほりにして一ヶ月も修業すれば實に驚くほど聲の上達するものです。もうかうなれば決して聲がつぶれるなど言ふ事はなく、却ッて每時幾時間も無茶苦茶に稽古したのよりは遥にいゝ結果が出るものです。

寒い時候の時には氣を注ける事が有ります即ち其時聲をつかッて後直に急に外の寒い空氣にあたらぬ樣にする事です。其わけは既に聲をつかつたため咽喉は熱して居る、其處へ突然冷な空氣が流れ込めばそこに寒熱の激變が起るわけで、從つて之がため自然風邪にも感じる、さアその風邪といふ者は聲など稽古する人に取ッては第一の敵でしやう。　今日英國で有名な女俳優りざ　れヱまん孃が而も此頃其事について書いた事が有りました、即ち同孃はろんどんで一席聲をつ

かつて後つひうつかり外へ急に出て處秋風がたちまち咽喉へしみて俄に風邪にかゝり、直にいはゆる流行のインフルエンザに爲つたとの事です。　それから急ぎ手を盡して醫者に治療を望んだ處ろいぜ氏ハキニーネを用ゐ、マツガツキン氏ハ何かの鹽類を用ゐましたが、而も本人が一番利いたと思ツたのは疑ひも無くアンモニア瓦斯で之を吸ひ込んで咽喉にふれしめてやうやく治つたとの事です。

また是と反對な場合の事をも言はなくてハ爲りません、即ち極めて身体を勞役した後には決して聲をつかふもので有りません、乾度害が有ります。

さて是から食物について言へば胡椒唐辛子山葵のやうな辛いもの、醋氣の多いもの、油氣（ことに胡桃）の多いものなど最も聲の毒です。　其他苦い茶、酒類なども毒で、ことに又其外に人の氣のつかぬもので非常な毒になるものが有りますそれは外でも有りません、芳香のつよい物です。　有名な女俳優ぜんにい　りんどハ何よりも菫菜の花をさらすました。　それから襟の邊を窮屈にするのハ素よりいけません。その事に於て日本服は上等です。

（をはり）

女學生の不品行

女學生の不品行猶其實やまぬ氣色のある事に就いては餘程前にわれ／＼もいらつめに彼是出した事も有りましたが近頃に至つてハ其醜聲がまた些し盛りになりました。　かゝる浮評の出るのハ實際の萬分の一にも足らぬ事であらうとは豫め推し測るものゝ兎に角好もしくない至りです。　あゝ女學生の醜行を擧ぐれば間接にうれが女子敎育を妨げるものになり又言はなければ終に醜行が他の私事と許くをのみ望む人の餌となります。　どうしたらいゝ物か、爰に至つて茫然となるばかりです。

丁抹素服組

一日一日と驕者が進んで終に止まる處を知らぬばかりの有樣が即ち此日の西洋の交際の社會で、丁抹の樣な質朴な風の國さへ此二三年このかた同じ渦にまきこまれて日一日に花車を鬪はせるやうに爲つた、うれが終にモルトケ伯爵夫人をして丁抹素服組といふものを創立させるやうにしました。　其組の目じるしとして左の胸に銀の十字架をかけるといふ事で狡猾な或る悪口新聞は「なぜその十字架を鉛でつくらぬ」と

あざけりました。　絹、天鵞絨などの美服は一切禁制で、鳥の毛つくり花みな排斥されました。　其規則の中に首服せぬ處も有りますが最も卑見なのは

肌を露す禮服

を禁制しまた毛を故さらに縮されせる風をも排斥した事です。事の行はれるかどうかは分かりませんが、一注意を世に與へたには違ひ無い事です。

外國に對する醜態の婦人

廢娼論を唱ふると同時に日本婦人が海外に於て醜業をいとなむのを論じて騒ぐ人が何故無いのでしやう。　廢娼云々は何にしても内輪だけの問題、之を今日に急がすとも焦眉の急が有るといふ程でも無し、それより先きに氣を注けるべき事が有つたならその方にまづ心すべき事でしやう。　われくは廢娼論者の有るのを見ていまだ外國に於て醜業をいとなむ日本婦人を論ずる人の有るのを見ません。　神奈川縣からもたらした報告を見ないのですか。　いよく出でゝいよく先方に渡航する數が殖えてやがて支那人の二の舞をも爲すとの事。　あゝ此恥ぢは何うかしてかきたくないものです。

打ちすてゝ置けば年を超えずに日本婦人は莫連との評を歐米の市場に買ふ事でしやう。　其局の人の猛省を願ひます。

ことしの夏物

足利の知らせによれば本年の夏物は矢張りチヽル縮であらうとの事です。　チヽル縮は昨年から現れて大に上景氣であつたため織元でも爭つて織り出したため今年はどうしても去年よりは二割方ぐらゐやすからうとの事で、自然また無上にはやるのは違ひの無い方です。　まづ一寸した着物には是が宜しいです。　夏の御支度の方は一寸御考へなさい。

通信女學

女學雜誌社から出版した婦人の知るべき事を書きあつめたもので學校に行かずに學問の出來る書物です。　地方などの諸嬢には至極適當なものでしやう。

わらべ

岡山市から第一號を此間出した幼儀必讀の好雜誌で、文章も亦流麗です。　地方雜誌中では出色のものです。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

料理學校

いらつめに毎號料理法を出す岩間芳松氏は貴顯紳士の間に知られた料理の名人でいよ／＼その兼ねての目算どほり料理專門の學校を芝區明船町の自宅に開かれました。入學は男女に限らぬとの事で、猶熟達の上は本人の望みにより相應の處ろも周旋するとの事です。

矯風會事業擴張

婦人矯風會員はいよ／＼規模を廣め、銘々ゞ分擔を定め、着々矯風の實を擧げる事になり、部類を禁酒部、敎育部、政權部、慈善部、衞生部、風俗部の六部に分かたれたとの事。

文學に口實をつくる

文學研究に口實を假り、猥褻な院本、脚本、洒落本、中本ならびに元祿時代の文章を愛讀する人が有るとの事です。あゝ文學も其弊ハ是です。「ハロールドを讀むもの豈バイロンたらんや」との西洋の言葉も有ります。遊仙窟を讀まずとも才ハ埋まるべきものでも有りますまいに…あゝ其罪は誰がつくりました？

柳暗花明

そろ／＼柳暗花明の時候となりました。柳堤に金鞍の出るのも間との無いと、同時春氣に蒸されて人の氣が迷ふ時ともなる事です。あゝ花見、梅見船、外面から見ればいかにも優美、しかし優美が一歩を轉ずれば醜陋となる事、やがて龜井戸の梅園に立やの字を見、墨田づゝみで束髮に逢ふ事ともなつて、さて其後…つまらぬ苦勞ながら是非いくらかは有りうちの事、父兄との御同伴が何よりの事でしやう。

令夫人の面會日

後藤伯爵夫人其他一二の令夫人がたは一定の來客への面會日を定められた由です。交際社會ますます支度がとゝのひました！

船に乘る心得

英國で有名な船將くつく氏が或人に物語りたる船に乘る心得ハ覺えて置く價はたしかに有ります。

第一　濕つた衣服

をば手早く脫ぎかへるのを忘れては爲らぬ事で、或は雨、或

は霧などに逢つたら直に乾燥したのに着かへるが宜しいとの事です。

第二　多く食べる

事を加へるが何よりで、成るべくハ充分と思ふより猶すこし食べて居るのが通常の乗客には第一の法で、是なら醉つて吐く事も少いとの事です。

第三　あまり身体をつかふ事

も扣へなければ爲らぬ事で、物めづらしため幾度も甲板などへ昇り降りたるのは最もわるいとの事です。

第四　酢

の類は少々ぐらゐ用ゐてもわるい事は無く、適當に用ゐれば船の醉ひを免かれるとの事です。　たゞしまた用ゐ過ぎると逆上する故その邊はつゝしまなければならぬとの事です、

第五　脂肪性の物

も人に因つて違ひ、不斷から油ものに馴れて居る人は左程でも有りませんが、で無いものは多く脂肪を用ゐたゝめ吐氣を濟して終に醉ふとの事です、

沐浴の心得

身体が熱して居るとか又は疲れて居るとかいふ時に急に冷水で沐浴するのは極毒で之が流行病と呼ぶ種にもなります。ある處に四人の農夫が有つて一日はたらいて身体もほてり且くたびれた、それを治さうとて側の流れ河へ飛びこんで冷えて居ると、突然一人には其場でウツトリと爲つて終に溺れてしまひ、また一人はそれから歸つて翌朝になつて死に、また一人ハ三週間ばかり煩つて辛く治つたといふ程です。

身体健全法

一　朝はやく起き、夜あまり更ぬ内に臥す。

二　毎朝冷水で全身を洗ひ、乾いた手拭で顔をこすり拭つて血のめぐりを奬ます。

三　飲物ハ水を第一とす、酒類は最もわるい事。

四　身をくるしめる衣服を着ぬ。

五　空氣の流通のいゝ部屋に眠る。

六　のぼせた時ハ冷水で怠らず頭をひやす。

七　物を食べ過ぎぬ。

八　動物質の物を多く用ゐぬ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

右はわかり切つたやうてすが、さて分つただけ實行する人は少い事です。わかつたなら分なつただけ實行すれば現在長命にもなる事が出來るのは疑ひもないのでそ。

寄書

大川氏之御相談に就て

高田次雄

大川氏より今後いらつめ紙上へ數學上之事を掲載可被致趣御相談に相成候處素より數學ハ敎育上必用之者なるとは巳に確定致し居り候事ゆゑ決して異存無之候得共いらつめは御存じの通り僅葉より成立ち一部僅かに二十ページ內外に有之書中には家政を始め文藝美術其他通信問答等に至るまで如何に必用なる科目數種掲載有之候に付從前之儘にても一科每に紙數は僅々二三ページにしか當らざる勘定に有之候然るに此に又數學之一欄を設け候はゞ又其數學上に付ていらつめ方之質義問答も起る可く夫れか爲め又紙數二三ページ要す可く此く在りては紙上益々狹隘を來し折角の玉章も切れぎれになり大に物足りぬ思を生ず可くさりとて數學之必用なるを悟りつゝ其儘掲載せざるも無念の至り而巳ならず大川氏の御厚情にも背く譯に付き願はくは誌價を引上け紙數增加すと御掲載に相成り度先つは思ふ所を申進候也

明治廿三年一月十七日

通信問答

夕山人さまへ(一)婦人の事を巾幗と云ふのは孔明の故事から世に用ゐられたので、孔明が敵の司馬を嘲けるため婦人の持物の巾幗を贈つた、それから巾幗と婦人の事に通稱するのです(二)夫も婦も共にツマと訓ずる、是は日本の古語で、もと日本では男女を問はずツマと互に呼合ツたのです(三)女の手紙につけるカシクはカシコで即ちカシコシとの意味ですまづ男子が謹啓といふのと同じ事です(四)國民の友にある福州學人は石橋忍月氏の別號との事です。　SSSは新聲社の略字で即ち森鷗外氏の社中です(五)御說のとほりです。

堀江しづ子さまへ(一)靴へ塗るにはインキより靴墨の方が宜しいです然し靴墨とて安全無害の物でも實は有りません(二)學水女史は福岡つれといふ人で、大坂北濱住居です(三)鼠を取るいゝ方と言つて、猫を除けば鼠オトシ位なものでしやう(四)東京の新聞で一番賣れるのは知りません人の說によれば東京朝日であらうとの事です但し信僞は保證しません。

幽菊女史さまへ　岡本ねい瑠女史の住居は淺草雷門前いろはです

伊藤正子さまへ(一)麥酒、奕蘇酒、ブランデイ、利久、葡萄酒等製法は一行二行で云へません故略します(二)硝子瓶のまはりに石油に浸した紙のコヨリを圍ふやうに卷き付けそれへ一齊に火をつければそこから美事に硝子瓶は切れます

笹川はる子さまへ(一)十六七歲の淑女の着物の縞らのには別に新樣も有りません(二)ハンドコロンの奏効は人により違ひますが平均三ヶ月です(三)食後に不熟又は不消化でさへ無いなら果物は最もよろしいです

立花くに子さまへ　記臆法の書物の効の有無は知りません

石川のぶ子さまへ　婦人教育に關係する社は大抵和歌添削の照會をとします。

山里さまへ(一)毛布野女史の本名は藤すめ子、翰軒主人の本名は佐藤六石、眉山人の本名ハ川上亮、漣山人ハ岩谷季雄、愛鶴軒子のは淡島寒月、湖處子のは宮崎八百吉、不知菴主人のは內田貢、北部散士は子細あつて言ひますまい、藤陰隱士は藤本眞、三遊亭圓朝の本名出淵次郎吉

湯本なか子さまへ　小新聞の中で猥褻を除いて高尙且面白いのは改進新聞でしやう(二)髮の毛は一週に三回洗へば宜しいです(三)函根地方に限らず槪して大抵の溫泉は一日三回以上入浴するのはあまりよく有りません。

夕山人さまへ（一）天刑病さは癩病の事です（二）感冒を防ぐ法は今までのいらつめに度々出しました（三）婦人に長命の多いのは主に男子より貞操で且あらくゝい處に立入らぬのが原因でしやう（四）竹のや主人は饗庭村氏です。

某史へ　御尋ねの事此雜誌では公言は出來ませんからもし御聞きたい事ならば御本名御住處を御知らせください通信で御答へします。

松田みさほさまへ（一）通信問答は誰がしても宜しいです（二）產婆營業に必用なのは色々あります矢張り普通醫者だけの心得をまづ知るべき事です（三）婦人の名の下に子の字をつけても貴賤に對して禮を欠くさいふ事にもなりません（四）重炭酸ソーダを入れて物をやはらかく煮るのハソーダの量さへ少ければ無害の方です。

中里まさ子さまへ　レーフルさサルサ根さもに服して差支はありません鐵丸よりサルサ根が宜しい方です。

濱本うめ子さまへ（一）硼砂は入用ならば紹介してさし上げます（二）ハンドコロンは誰にも無害です（三）椿の實は一瓶六錢です

Beautifvl Lady さまへ（一）食後に茶碗をふせるのは最美な風ではありません又食後に箸を左りへ立て掛けるのは宜しくありません（二）玉子は煮たべるが宜しいです、食べ方は半熟が第一です

疑問（一）當時琴等はやはり古風を用ゐ侍るにや又は改良されたるふしも侍らんか（二）其唱歌はいかに。古きまゝを用侍るにや但しは新らしきも侍らんかさもあらばその曲譜さも示されよ……問者川口恒子（貴答本月限）

（三）綠日の起原及其意味（四）現今我國流行の淨瑠璃の種類及其起原（五）一月に雜煮を祝ふ起原（六）ブライト氏病の性質（七）完全なる東京の繪圖……問者中山元子（貴答本月限）

（八）銀行及官省撰記自宅豫習書の名（九）蔗寫板製法……問者咬菜軒主人（貴答本月限）

貴答の方にはいらつめ一部進上

少年文範

上下二編、全一冊。
定價金五拾錢、郵税書留料共金拾二錢。

文學の隆興實に今日の如きはなし。而して文章の荒廢又今日の如きはなし。此際少年の文章を學ばんとするものは、實に進路に迷惑せざるを得ざるなり。本園夙に之を憂ひ、世の少年をして據りて以て摸範とすべき一書を編し、邪徑に陷るに至らざらしめんと欲する久し。因て本年の春より此書の編輯に從事し、此に漸く印刷に付するに至れり。書中載する所は今人古人の名文中事實文章兩ながら妙なるもののみにして、或は紀事あり、或は論說あり、一として天下の稀有の奇文ならざるはなし。殊に每篇親切の批評を加へ、或は總評し、或は其人の小傳を掲げ、或は其人の文章を分拆したれば、一讀の下其人の文章と分拆したれば、一讀の下其人の知る所の文章と悟したれば、一讀の下其人

東京北豐島郡上駒込村十九番地
少年園

二十一集ヨリ三十集迄十部割引四十三錢
衛生家　婦人令孃　有益之書　三十七集發兌
本集ヨリ一部七錢五厘十部前金七十錢也

○庖丁鹽梅

庖丁鹽梅ハ即チ料理ノ掽ヘ樣カラ紀元日本ノ大ムカシヨリ當德川家時世ハ申スニ及バズ明治ノ今日ニ至ル世上料理ノ面白ヤ御咄シモ又掽ヘ樣ノ發明人何事モ衛生上之事ナラバ婚禮式ヤ床ノ間飾リ又ハ西洋料理支那料理之掽ヘ樣別テ本集ニハ術ニ有益ナル事計リ其鹽梅ハ一讀ノ上御賞味アラン事ヲ願フニナレ

本集ニハ料理之紀元庖丁式之圖附錄アリ

東京市京橋區鈴木町
庖丁鹽梅
三信舍

眞理

第五號

毎月一回廿日發行
二月廿日發兌

眞理 ●國家と基督教會 ●聖書創世記の事果して眞乎 ●決闘論◎聖書●約翰福音◎雜錄●基督教に於ける保羅の勢力●忘想と理想●ハザン、アルハバルの話(第一回)●看護法と衛生との相互の關係を論じ看護人の心得に及ぶ◎文園●摘英◎雜報●建國祭●金鵄勳章●新島襄氏●朝鮮の危急●自由旅行を許す勿れ●インフルーエンザの病徵●存娼の辨護者●藩閥の餘波●水崇●吁亦甚矣哉●好摸範●七大慈善●切支丹の制札●歐州の平和●使徒信經●禁酒策●禁酒會●長壽の秘譯●魯國に奉教自由なし●諸威のプロテスタント教●一勇卒●社會改良●加特利刀教の勢力●百萬長者の時代●眼相學●新驗温計の發明●一奇◎月報●普及福音教會錄事◎一册定價八錢半ヶ年前金四十錢一ヶ年仝八十錢●全國無遞送料●郵券代用一割增(五厘切手十八枚)見本は五厘切手十七枚を要そ

東京神田駿河臺鈴木町十一番地

發行所 世光社

●學問の致したき人は此廣告を見るべし

出版月評は天下の書籍及び雜誌類を公正に可否評論する雜誌なり其中に「博聞雜誌」を評して曰く「其記載事項は論說なり歷史なり傳記なり天文なり地理なり人事なり農事なり工業なり商業なり技藝なり理化なり衛生なり教育なり教法なり文籍なり貨物なり雜事なり廣告なり凡そ學術に關し人事社會に有とあらゆる必要なる事柄は殆ど此雜誌中に籍を有せざるはなく彼の所謂內地雜居にはあらずして百事雜書と云ふべし蓋し至當の評ならん惟ふに近來雜誌の流行と共に雜誌學者なる者頻々世に現れ來れり去れば此雜誌の如きも其目的は讀者をして博聞多識の士とならしめんと欲するにありと云へば所謂雜誌學者たらんとを望む者には隨分適當の雜誌なり尤も他の專門雜誌の如く或る一事項に就ては充分精細なる能はずと雖も種々なる學術の簡要を知るには頗る便利なりと言ふべし」と至當の評と云ふべし

●**博聞雜誌**は東京京橋區弓町十番地博聞雜誌社の發兌にして毎月二回一册八錢十二册九十錢廿四册一圓七十錢無遞送料なり

懸賞小說募集廣告

●題 春季ニ係ル者 ●頁數 一頁十二行一行廿四字詰五十頁以内 ●文体 何種を限らず ●宿所 姓名は別紙に認め原稿には別號亦は符號を記する事 ●期日 四月十日限堅〆切 ●賞品 壹等金拾圓 貳等金五圓 三等金貳圓 以下秀逸之分五種を撰拔し以良都女一ヶ年分より三ヶ月分迄亦ハ其に相當する書籍雜誌を贈呈する事 ●撰者山田美妙齋主人 ●受賞之小說は此を以良都女に掲載するか亦は一部の書として出版する事 ●原稿屆所 大阪市西區南堀江上通四丁目百十四番やしき

嗜文會

美人二十名

滿員の上は謝絶の事

世界第一身体白色劑料ハンドコロン完全無比なる血液清滌劑サルサ根佛國流行ポマドンヌールなどの奏効確實衛生無害なるを世に證せんため御望みの有る世の令孃令夫人其他婦人にして治療を望まるゝ方ゝは右藥劑を無謝儀にて服用せしめ且醫學士の診察のうへ必要の衛生法を固く守らしめ不日にして肉色櫻紅肌理秀麗たらしめんとぞ斯る實地廣告ハ泰西殊に米國などにて行はるゝものあれども我國にては甚少し今人員二十名を限りて貴需に應ずべし有志の婦人各位は速かに申し込まるべし既に小是にて奏効を得なば翁屋の製料の一大奇劑たるを知るに足るべし

明治二十三年二月八日

世界第一白色劑原料ハンドコロン、佛國新流行寒中化粧藥ポマドンヌール、日にやけぬ水、梅のゆき、薔薇、れもん等化粧最上化粧石鹼

一切化粧品專賣本舖

免許藥舖　おきなや

印刷所　東京神田區松下町十三番地熊田活版所

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY